

バレエ評論家・薄井憲二のソ連体験

——シベリア抑留とモスクワ平和友好祭の思い出(上)——

半谷史郎

ここに紹介するのは、2017年10月1日に京都ホテルオークラで行ったバレエ評論家・薄井憲二氏（1924～2017）の聞き書きである。薄井氏はこの話をうかがった二カ月後に鬼籍に入られた。二度目の聞き取りも予定していただけに、かえすがえすも残念でならない。ご冥福をお祈りしたい。

薄井氏は、各紙の訃報記事が伝えたように、日本のバレエダンサーの草分けで、日露のバレエ交流に貢献し、日本バレエ協会の第4代会長（2006～2015）も務めた。国内外のバレエ・コンクールの審査員を歴任したほか、バレエ資料の世界有数のコレクターとしても知られている（兵庫県立芸術文化センターが「薄井憲二バレエ・コレクション」として保管¹⁾）。

薄井氏は、筆者が近年関心をもっている1957年のモスクワ平和友好祭²⁾に参加しただけでなく、4年間の抑留生活も送っておられる。当初はこの二点に絞って話を聞く予定だったが、氏の快活な語り引き込まれて都合5時間にわたる大インタビューとなった。今や貴重なこの記録を三回にわたって紹介したい。本号では、主として1945年の出征前のことが語られる。

半谷：この間、薄井先生が書かれたものを確認してきました。基本的に聞き書きは、聞き手が関心を持って話を聞きます。今までのものならバレエ関係、ここ10年ぐらいはシベリア抑留でしょう。すでに活字になっていることは軽く確認だけして、できるだけ今まで語っておられないことを形にしたいと思っています。

そこで私の関心をまず明確にしておく、私は1957年の平和友好祭と当時のソ連が日本人にどう見えていたのかを確かめたいのです。

私はロシア語を専門で勉強して、ソ連にも留学して、今は研究者という形で一応生活できています。教壇に立つようになって10年ぐらいいでしょうか。ロシア語を学ぶ学生に歴史のことを講義する機会があるのですが、そのときに思うのは、今の日本から見たときにロシアが遠い。自分たちのこととして関心をつなぐものがあまりないのです。

薄井：そうかも。

半谷：しかも、私が専門しているソ連のことになると、さらに遠い。だから、どうやったら学生と話ができるのかで苦しんでいます。

薄井：今は共産主義のソ連は知らないわけだ。

半谷：あるとき思ったのが、だったら日本人がソ連をどう見てきたのか、そういう問いを立てれば自分たちにつながることをして話を聞いてもらえるんじゃないか。この話題ならいろんなことを入れられる。日本人がソ連をどう見てきたのか。嫌っていた人もいれば、好意的に見ていた人もいるし、物理的につながっていた人もいる。こういう日本人が見たソ連という形ならいけるんじゃないかと思って、いろんな人に話を聞いています。

日本人が見たソ連という観点で先行研究を探してみると抑留の話しかない。戦前までは文化交流の話とかいろいろあるのに、戦後は抑留しかない。これはおかしいと思うんです。戦後五十年弱、ほぼ昭和の戦後期にあたる期間、ソ連との間に抑留のことしかなかった、領土問題しかなかったわけがないんです。いろんな人がいろんな形でソ連に関わっていたはずですよ。

薄井：領土問題が今一番大きいんじゃないの、一般の人は。

半谷：大きいんです。大事なことです、それだけではないはずですよ。

薄井：こないだ雑談で京都新聞の人ともその話をしたの。自分の記事³⁾が出た後、いちど食事でもしましょうと会ったんです。京都新聞の記者は若い人だけれども、30ちょっと過ぎかな、領土問題をどう思いますかと聞いてきた。

半谷：そうなるんですよ。最初の話題になってしまって、その先に話題があればいいんですが、その先がない。だから、もう少しいろんな形の日本人が見たソ連というものを形にしておかないと、おかしいと思うんです。

そういうことでいうと、平和友好祭とか、薄井さんがされてきたことは大事なことです。今のロシアと日本とをつなぐ過去の大事な話なので、こういうことを形にしておきたいと思ってるんです。最近では平和友好祭に参加した方の同窓会「パジャルスタ会」の方々につながりができて……。

薄井：前は時々行ったけれども、遠いからね。

半谷：あそこで話をして、聞き書きができるようになったときに、今言った領土とか抑留とか、そういうのは違うソ連の印象を持っておられて、それがその人の一生を決めた、そういう大事な思い出が1957年にあったという方が何人かおられた。これは大事な話だから、今まで形になってい

ないけど、ちゃんと形にしておかないといけないと思ったんです。ですので、薄井さんにもいろいろ聞いておきたいというのが今回の趣旨です。

薄井：でも、私はシベリアから帰ってきて8年しかたっていないんだから、今となってみれば、そのときは8年というのは。

半谷：長いですよ。

薄井：長いかもしれない。でも今から見ると、その辺は一緒になったような、つながったような感じになっているかな。これは別の話だけれども、57年の後、ロシアに行くのは80年代になってから。

半谷：そんな飛ぶんですか。

薄井：すごく飛ぶのよ。85年が第5回モスクワ国際バレエコンクールで、突然、私に審査員の招待状が来るんです。でも、その2年ぐらい前に、ロシア・バレエの伝統についてという国際シンポジウムがあった。そのときに呼ばれているんです。それが2年前だったか、1年前だったか……。

半谷：じゃあ、そこまで30年近く空くんですね。

薄井：そう。もしかしたら、そのシンポジウムはもうちょっと前だったかもしれないです。今は日本に住んでる元大使館の書記官だったサルキソフ。

半谷：サルキソフ。はい、山梨学院大学ですね。

薄井：あの人の推薦で私はシンポジウムに行ったんだ。でも、その頃、私はソ連だから少し恐ろしい感じで、そんなに親しくはないから適当にしていたけれども、シンポジウムはソ連バレエ万歳、万歳と言わせているだけ。もっと露骨に言えば、グリゴローヴィチ万歳、万歳の会議だったんです。だから、あんまり印象的ではないんです。でも、たくさん公演は見せてもらった。それである程度、分かった。グリゴローヴィチは駄目な人なんだというのは、そのときに分かった。権威主義だし、アメリカの物書きの言葉借りて言えば、舞台上でスローガンを叫んでいる踊りだから、そういうものは面白くないんです。

半谷：グリゴローヴィチは今年〔2017年〕が記念の年ですよ。

薄井：今年、90年祭になるはずですよ。

半谷：ペテルブルグでもやっていました。

薄井：いらしたとき。

半谷：はい。〔2017年2月に〕モスクワは記念上演が続いていて、ペテルブルグもマリインスキー劇場の中で展示会をやっていました。

薄井：グリゴローヴィチのバレエというのは、ロシア人は割合好きなの？

半谷：好きなんでしょうね。音楽でいうと、大きな音が鳴る感じかな。あれはあれですごいと思います。ああいうのは普通の人にはできないので。薄井：そうね。でも、これは余計な話だけれども、ロシアでしかできないバレエもあるんです。例えば〈タラス・ブーリバ〉、それから〈ガヤネー〉。〈ガヤネー〉はシナリオが変ですぐやめてしまったけれど、音楽はきれいだった。

半谷：いいですよ。

薄井：部分的な踊りは残っていて、割合よくできている。全体がコルホーズの話で……、あっ、バレエの専門の話でごめんなさい。

半谷：いえ、いえ。

薄井：バレエのシナリオは難しいんです。何か言うと叱られる大変な時代だから、台本を書く人を公募したんです。多分、全ソ連から6作の応募があった。その中の1つなんです。みんなが一番いいと。でも、コルホーズの議長が酔っ払いで働かない駄目なやつで、奥さんが働き者でみんなに人気。それがコルホーズを立て直すという話だから、そんなものをわざわざ劇場で見ることはないでしょう。

半谷：そんな日常と同じものをねえ。

薄井：だから、一遍でやらなくなった。音楽はずいぶん後まで残って別のバージョンができたりにしているんですが、もう忘れられました。でも、そういうのはロシアしかできない。特に〈タラス・ブーリバ〉は断片が映像で残っていて、よくできたところがある。

ロシアは民族舞踊の宝庫でしょう。ああいう民族舞踊をたくさん作品の中に取り込むのは他の国ではできないんだから、ああいうのを中心にしてロシア・バレエは再生を図れると思うんです。なのに今でもバレエは19世紀のバレエでしょう。チャイコフスキーとか、19世紀のものでしょう。

19世紀のバレエで何が面白いかというと、マズルカ、ポロネーズ、チャールダッシュ。それからロシアで名前が付いたパナデロス、ハンガリー風のマズルカだとか。例えば、有名な〈海賊〉の中に出てくる群舞なんか他の世界じゃ使わない名前が付いた民族舞踊がいっぱいあるんです。

民族舞踊はバレエよりもうちょっと一般的ですが、バレエはいつてみれば、ブルジョア芸術です。20世紀になったって日本語でいうブルジョアではないにしろ、世界でも一般市民、金持ち階級のものであったでしょう。そういう性格を持っているんだから、どうしてもロック・ミュージックみ

たいに普通の学生とか、そういう人たちにバーツと広まるようなものじゃない。

半谷：ある程度、晴れの舞台の。

薄井：インテリ・ブルジョアのものだから、そういう人にアピールするには19世紀的な娯楽作品でもあったほうがいい。それをバレエは今忘れてるんです。そうじゃなくて、もうちょっと文学的、哲学的、前衛的、そういう作品しかやっていないから、私は毎月送られてくる『ダンスマガジン』を見て、世界で何をやっているか見るでしょう。見に行きたいと思うものは1つも無い。今月は1曲あったんです。ペテルブルグでやっている〈スパルタクス〉。これはグリゴローヴィチじゃないんです。〈スパルタクス〉の音楽ができて最初に振り付けたのはレオニード・ヤコブソンですが、そのヤコブソンのバージョンがキーロフ〔マリインスキー劇場〕でやっている。これはちょっと見たい。もし10年前だったら私はすぐに行った。

半谷：飛ぶんですか。

薄井：でも、今は見なくてもいいかと。映像もあったし。話がそれてごめんなさい。1957年に戻りましょう。

だから、私自身は40年代の終わりにソ連を見ていて、それから8年して改めてまた見たわけでしょう。だから、今、振り返ってみると、その間の差は非常に少ないんです。

半谷：時間軸でいうと、そうなりますよね。

薄井：こないだ、毎日新聞の日曜版に出た私に関する記事⁴⁾はご存じ？

半谷：知っています。読みました。

薄井：毎日新聞の支局の人はピロビジャンの近くのキルガにも行ったでしょう。キルガが私は一番印象深い。捕虜になって3年目です。3年目だからロシア語がほとんど分かっていたし、上の人も全部知っていた。電気がつくようになったし、文明に近くなっているから、3年目だから慣れてもいたし、これで政治教育がなかったら、この生活もあんまり嫌じゃないなと思いながら歩いていたこともあります。政治教育だけは大変な重荷でした。

キルガはシベリア〔鉄道の〕本線の所だから、57年の時に通るの。そしたら、あんまり口を利いたことがないトラクターの運転手とその奥さんが、トラクターを動かして働いていたのが汽車から見えた。

半谷：止まったわけじゃないですよ。

薄井：止まらない。だって、私がいた頃でもキルガなんて汽車の止まらない駅です。

半谷：でも、沿線に見えたと。

薄井：見えた。だから、時間にするとそうになってしまうの。だから、ロシアに対する感覚は80年代にまた行ったときのほうが。

半谷：変化が大きかった。

薄井：変化というよりは、何で驚いたかという、57年に一遍モスクワを知っているわけでしょう。57年、ご存じだと思うけれど、われわれは市内の公共交通が全部無料の乗車券をもらっています。だから、地下鉄もトロリーも何でも全部ただ。私は暇だったら自分で勝手に歩いて、言葉が分かるせいもあるけれども、全部自由行動でやっていたからよく見ています。でも、80年代に行ったら、57年に見たモスクワと寸分変わらない。

半谷：変わらないことに驚いた。

薄井：まず街にコーヒーショップが1軒もないんです。

半谷：ないですね。

薄井：90年代にはあったんじゃない？

半谷：90年代はぼちぼちありました。

薄井：ぼちぼち、そうだね。

半谷：ソ連の最後の頃に留学したので、雰囲気は分かります。

薄井：それから、夕方になるとホテルのそばに並ぶ所があって、昼間、何だろうと思って見ると、そこはビアホール。でも、80年代もまだそうで、それに昼間だって、どの店でも並ぶ。

半谷：並んでいますね。私も行列は経験があります。

薄井：どの店も。本屋とかは大丈夫だけれども……。帽子をちょっと見たかったです。毛皮の帽子は日本で売っていないから、これからロシアに行くことになれば帽子が必要なので買いに行こうと思ったけれど、80年代は帽子屋も並んでいるんです。

半谷：並んでいますね。

薄井：だから、57年と何も変わりが無い。それが一番びっくりしました。57年に戻りましょうか。

半谷：分かりました。戻りましょう。戻る前に一応、順番があるので、生い立ちから軽く確認させてもらいます。1924年3月30日、大正13年ですね、東京は大森のお生まれということで、お父さまは婿養子なんですか。

薄井：はい。

半谷：〔東大の応用化学を出て〕三共で働いていらして、アメリカでベークライトの技術を習得して。

薄井：技術じゃない。ベークライトっていう物を見ただけじゃないかな。輸入販売を手掛けたと思います。

半谷：お父さまの^{くにたけ}邦茅さんが婿養子ということは、お母さまのほうが薄井なのですね。お母さまの一族は、どういうご家庭だったんですか。

薄井：母の父はちょんまげ時代の人です〔後出の註14参照〕。どういう地位か分からないけれど、徳川家の家来です。ほとんど推測なんですけれども、徳川政府が終わったときは明治政府に引き継がれたみたいです。

半谷：役人というか、事務をやるということで。

薄井：うん。そのときは何と言ったのか知らないけれども、大蔵省的な所にいた。そして、母やら兄やらが言っていたのを覚えているんですが、金座〔江戸幕府直轄の、金貨の鑄造・鑑定・発行所〕に出仕するお役人だったみたい。

半谷：金座ですか。

薄井：金座。銀座じゃないの。金のほう。だから、財務関係をやっていたみたいです。兄が言うには、徳川時代はまだ子どもで、お城に行くと「薄井殿、よう参られた、今日は何も用事はないので、どうぞお帰りになって結構です」と言われて。

半谷：行くだけですか。

薄井：ええ。おじぎして帰ってきたという話を兄が誰かから聞いています。

半谷：そうすると、お母さまは代々、江戸＝東京にお住まいの一族だったのですね。

薄井：そう。うちは神田神保町です。石高も身分も分かりませんが、神田神保町の家は非常に大きな家で、中にお茶室が2軒あった。

半谷：かなり大きいですね。

薄井：家は大学の隣なんです〔東京商科大学＝現・一橋大学か〕。祖母が言っていたんですが、野球のボールがしょっちゅう入ってきて、学生が謝りながら取りに来たらしい。

半谷：それが大森に移られたのは？

薄井：どういう理由か知らないです。

半谷：大森に、ある時期に移られたんですね。

薄井：ええ。でも、移ってよかったです。だって、全部焼けたもん。

半谷：そうですね。あそこは空襲で焼けました。

薄井：いや、関東大震災で。

半谷：その前か。

薄井：そう。私の母がそこにいて焼け死んだ恐れもあるわけだから。

半谷：関東大震災の前に大森に移ったのなら、大正の初めか、明治の終わりぐらいですね。

薄井：いや、大正何年かでしょう。少し赤坂にいたというような話もしているし、うろうろして土地を見つけて大森にうちを建てたんだと思います。

半谷：ご兄弟は、お姉さんが3人とお兄さん〔薄井恭一（1917～？）〕が1人ということ。

薄井：弟が1人〔長岡祥三（1926～2008）〕。

半谷：あと弟さんもお1人ということは6人兄弟。

薄井：そうです。

半谷：お姉さんとお兄さんが学習院ということですが。

薄井：女3人と兄は学習院です。あとは母親も。

半谷：でも、薄井さんは成城学園ですよ。普通、みんな同じ所に行くと思うんですが、何かあったんですか。

薄井：小学校に行く段階になって、私は自分で近所の学校がいいですと言った。幼稚園なんてその頃はないから行かなかったし、学校に行くんだったら近所がいいと思ってたら、歩いて行ける所に学校があったの。うちでもそのほうが面倒はないと思ったんじゃない？ でも、1年か、2年ぐらいはあれが付いてきました。

半谷：お手伝いさん、女中さんが？

薄井：そう、そう。要らないと私は一生懸命、言うんだけど、行きだけはね。帰りは一人で帰ってきました。近い所にあったんです。

半谷：学習院だと当然、今と同じ目白ですよ。

薄井：そう。電車で行かなければ駄目。

半谷：ぐるっと山手線を回らなきゃいけないですね。

薄井：ある日、母と父が話し合ったんでしょう。こういう所の小学校にいと、中学の試験も受けなきゃならない。次に高校の試験も受けなきゃならない。それは大変だろう。成城学園は7年制高等学校だから、あとは大学の試験が待ち構えているだけで、すうっと進むわけ。

半谷：しばらくずっと行ける。

薄井：そんなにバカでなければ。だから、それがいいだろうということになったらしくて、私に相談も何もなくて。

半谷：行けと。

薄井：小学校の5年生から成城です。

半谷：あとは後々に関わってくることだと、東山千栄子さんの〈桜の園〉を見られたそうですね⁵⁾。

薄井：母親の同級生です。近所に住んでいらした。どこかは知らないけれども、なんで近所だと思ったかという、ボルゾイというロシア犬を3匹ぐらい飼っていらして、書生さんが毎日うちの近くを散歩させているので、東山さんは近くにいらしたと僕は知ったの。

半谷：お会いしたことはないんですか。

薄井：そのときはないです。戦後はありますけどもね。そのころ母の所に築地小劇場の切符が何枚か毎月、来るんです。毎月というか、公演があるときに。でも、それは払ったのか払わないのかは知らないです。とにかく切符があった。東山千栄子さんは女優になったので、学習院の同窓会を除名されています。だけど、東山千栄子さんは母の法事のときにいらした。「同級生は会っても知らん顔していたけれども、薄井さんは近くだったし、いつでも〈お元気？ しっかりなさいよ〉と言ってくれた」。近所だから付き合いがあったんじゃないかな。それで切符が来ていたんでしょう。

それをちょっと見たいと思うようになるの。だから〈桜の園〉も見たし、それから、一番覚えているのはソートン・ワイルダの戯曲で〈わが町〉。あれは、東山さんは出ていなくて別の人が出ているけれども。それから、チェーホフの短い芝居で、3人ぐらいしか出ない〈結婚申し込み〉。あれも見に行った。とても面白かった。結婚の申し込みに来る若い男が上手で、映画にずっと出ている方だったけれども、当時有名な音楽学校のピアノの先生の弟か何かなの。だから、うちでは時々話題になって、ちゃんといっておうちでピアノをなさっているのに役者になってと話題に出る方だったけれども、ずっと最後まで映画の脇役でお出になっていました、名前は忘れたけれども。そういうものはそこで見ました。

半谷：演劇ですよ。あとは、中学校に入る前に〈火の鳥〉のレコードを聴いて、ある意味、人生が変わったと⁶⁾。

薄井：中学校のときじゃないの？

半谷：中学校のときですか。

薄井：うん。

半谷：それまでも音楽は聴いていらしたんですね。

薄井：上の2人の姉がピアノを弾く人だったんです。

半谷：じゃあ、家庭の中でも音楽はピアノが流れていた。

薄井：流れていた。2人いるからピアノが2台あって、しょっちゅう聴いているからベートーベンのソナタは大体、今でも耳にあるし、ショパンの曲もある程度知っている。

半谷：小さい頃から演奏会は行かれましたか。どうですか。

薄井：成城になってから行ったと思う。

半谷：成城になってからですか。

薄井：だから、やっぱり中学です。中学、高校のときはよく行きました。

半谷：中学校のときに〈火の鳥〉だとすると、〈火の鳥〉より前はどんな曲を聴いていて〈火の鳥〉が衝撃だったんですか。何との比較なんですか。

薄井：うちで聴いているクラシック。

半谷：それは、お姉さんのされているピアノの曲とか。

薄井：そう。それから、自分で好きになったのも少しあった。オペラの〈カルメン〉。なぜかあれが好きになってレコードの目録を見て、これは幾らするだろう。SPの12インチという大きいのは高いんです。1枚3円ぐらいするの。それが12枚要るの。そんなもん買ってもらえないでしょう。でも、欲しくてしょうがない。ついに探して10インチ、これはもっと安いんです。10インチで、5枚で済んでいるやつがある。

半谷：抜粋か何かですか。

薄井：抜粋なの。それはもうちょっと後になって買うのかもしれないけれども、自分で買える。

半谷：買ってもらうのではなく、お小遣いで、自分で買っていたんですか。

薄井：ええ。だから、最初にショパンやらベートーベンやらが耳に入って、自分では〈カルメン〉がラジオから流れるのを知って好きになって、ある程度オペラも好きになって。それから、映画で。

半谷：伴奏の音楽がありますね。でも、当時だと、映画は生演奏ですか、それともトーキーがもう始まっていましたか。

薄井：トーキーの時代です。だから、少し時代がずれるけれど、例えば、〈オーケストラの少女〉なんてストコフスキーの出る映画があって〔1937

年制作、日本公開は同年末]。

半谷：あります。有名なやつ。

薄井：有名よね。あれはもうちょっと後かもしれないけど、ああいうので例えばリストの〈ハンガリアン・ラプソディー〉も聴くし、耳に入っていて、そういうものの上に〈火の鳥〉があるの。

半谷：衝撃なのは分かります。音楽の質が違うので。

薄井：そうですね。現代はこういう音楽なんだ。現代音楽でシェーンベルクとか、無調の十二音階みたいなのは好きじゃないけれども、〈火の鳥〉はメロディーもあるし、ストラヴィンスキーの初期は子どもにも分かりやすいんです。

半谷：分かりやすいけれど、違うんですよね。

薄井：そう、そう。ちょっと不気味さがある。未知の世界が開けるようなところがある。

半谷：それがバレエとつながっていく一歩なんですね。

薄井：古本屋に行って『音楽世界』といった雑誌を見ると、どの雑誌にもバレエの話が1つぐらい載っているの。その頃、ヨーロッパに行って見てきた人の話もあるし、レコードの説明でバレエのもあったりする。そうやって、バレエの知識が増えていくわけ。そのうちに第一書房という出版社が倒産して、数寄屋橋でセールがあった。

半谷：在庫の安売りですか。

薄井：そう。その中に大田黒元雄の『ロシア舞踊』というのがあって。それが10円なの。10円をお小遣いからごまかすのは結構大変なんです。でも、ごまかして買って何度見たか分からないほど一生懸命、見ました。中身は、セゾン・リュスのこと、1909年から1929年までの話です。

半谷：そういう形でバレエが見えてきた。

薄井：でも、それより前にエリアナ・パヴロワさんは2回ぐらい見た。

半谷：それは書かれているのを読みました。でも、そこまで感激しなかったというような書き方でした⁷⁾。

薄井：感激はしなかった。だって、デブのおばさんだもん。ただし、1つだけ。調馬の踊りは良かった。テールコートを着て男のなりをして、シルクハットもかぶって、ムチを持って馬の調教師のつもり。これは子ども心にも面白かったし、感心した。その頃、同時に宝塚も見ている。

半谷：書いてありますね⁸⁾。

薄井：どちらが先か分からないけれども、宝塚を一番初めに見たのは多分、〈トゥーランドット〉です。その中に舞踊専科で神代錦という人がいたの。その人が全身黒の衣装で、黒いはちまきでムチを持って踊る。ムチの踊りと言っていた。これもやっぱり感心した。

半谷：何となくバレエの好みが、その辺りからできていますね。

薄井：そう、出来上がってるの。何かになって何か踊るといのが好きなんです。ただのステップのつながりはあまり好きじゃないわけ。

ちょっと前後しますが、昔は映画館に行くと、映画の間に児童映画があったりしました。子ども向けの番組で漫画大会。たぶんディズニーの初期の白黒の漫画がずらっとあって、それが終わったら実演があってというのです。ピカデリー劇場という名前で東京にはしばらくあったけれども、その頃は邦楽座。そこで漫画大会と実演があって、その実演でどき回りのスペイン舞踊家セニョリータ・ヴァニタが踊りました。

半谷：日本人ですか。

薄井：いえ、ちゃんとスペイン人です。私は席がなくて後ろに立っていたから、本当は見えなかったんだけど、めったに一緒に出掛けることがない父親と一緒に、ちょっと持ち上げて見せてくれたんです。そのときに一瞬だけでも、上手から下手にセニョリータ・ヴァニタが闘牛士のマントを持って翻しながらパーツと走った。びっくり仰天。あれはどうやったら、あんなにできるんだろう。うちへ帰ってまねしたけれども、できない。だから、そういうものにちょっと刺激があったんです⁹⁾。

半谷：今の話は何歳ぐらいになるんですか。中学前ですよ。

薄井：それは小学校。8歳か、9歳ぐらいです。だから、セニョリータ・ヴァニタが一番初め。

半谷：踊りという意味では。

薄井：うん。エリアナ・パヴロワよりも前。

半谷：今、いろいろと小さい頃に見てきた芸術の話をしてしていますが、踊り以外はどうでしたか。

薄井：歌舞伎を見るとか。

半谷：例えば、歌舞伎は見る。

薄井：見るようになった。それは中学の上級生ぐらいになってから。

半谷：連れていってもらおう、自分で行く、どちらですか。

薄井：連れていってもらおう。それは偶然のきっかけがあったんです。わが

家は大磯に家があったから、夏は大磯に行く習慣だったんです。

でも、わがままな子どもたちが6人もいるんだから、海ばかりで飽きたから別の所に行きましょーと言って、箱根の仙石原の旅館に夏に3週間ぐらい泊まったことがあるんです。同じ旅館に4代目の歌右衛門かな。4代目の歌右衛門に、6代目の福助です。

半谷：いらしていたんですか。

薄井：ええ。それから、何代目かの児太郎。その3人を含めた歌右衛門一家が同じ旅館に泊まっていたの。だから、自然に口を利くようになって、ビリヤードなんか一緒にしたりして、福助も児太郎も役者なのを知って、じゃあ、帰ったら見に行こうとなって、母親はその前にも歌舞伎は見ていたから、じゃあ、おまえも連れていく、それで初めて歌舞伎を見た。面白かったの、とりつかれるわけ。

半谷：基本的に舞台はお好きですね。

薄井：宝塚も好きだから、多分そうです。だから、宝塚も定期的に行くわけ。しょっちゅうは連れていってもらえないけれど、あの頃、女子学習院の女の子は全員、宝塚に夢中なんです。姉の同級生なんて、うちに遊びに来ても、みんな宝塚の話しかしないもん。

そんなしょっちゅうじゃないけれども宝塚にも行っていました。これは話が飛ぶけれども、宝塚で〈ペトルーシユカ〉があった。〈祭礼の夜〉という作品。それは、私がもうストラヴィンスキーを知っている後なんです。だから、あれは〈ペトルーシユカ〉とすぐに分かりました。だけど、音楽が違うの。

半谷：話だけ持ってきているということですよ。筋だけ。

薄井：そう。でも、後になって考えると、原作のフォーキンよりもよくできている場面が1カ所だけあった。

半谷：それは書かれていましたね。投げ扇の場面。

薄井：そんなこと書いたかしら。

半谷：どこかで読みました¹⁰⁾。舞台の話が続きましたが、この頃は演奏会にも行かれていますよね。

薄井：それは中学生の上級生になってからです。

半谷：当時だと日響ですか。

薄井：新響〔後のNHK交響楽団。「日響」改称は1942年5月〕。成城は上の学校も付いていたから、女性も入れて四部合唱ができるんです。コーラス

部があった。兵隊さん万歳の時代だから、コーラス部に入る人はなかなかいないんです。でも、コーラス部に入った。最初に大演奏会の曲を練習したのはハイドンのオラトリオの『四季』。

半谷：あれをやられたんですか。

薄井：あれを最初に歌って、そのときに新交響楽団の定期演奏会の演目になって、日比谷公会堂で新交響楽団と一緒に出たんです¹¹⁾。でも、その前から成城の合唱団はヴェルディの『レクイエム』でレコードも出てます。

半谷：違いますね。

薄井：ただ、それは私より前なんです。私がまだ大人の声になる前。

半谷：でも、それは成城に入ってから、そういうことをやっている所だと気が付いたということですか。

薄井：そう、そう。

半谷：でも、そういう意味では、実際にいい環境でしたね¹²⁾。

薄井：平和だったからだね。ただ、中学になると軍事教練があるから嫌だったなあ。軍事教練なんて鉄砲を持たされるわけでしょう。鉄砲を外して中を掃除して組み立てなくちゃならない。不器用だから、ついに本当の兵隊になったときもできないんです。でも、誰かがしてくれるから、放っておけばいいだろう。そういうのが好きな人がいるんだもん。

半谷：おかしいですね。

薄井：でも、話が飛ぶけれども、成城の高校になって最後の頃には実弾射撃があるわけ。射撃は上手だった。

半谷：そうなんですか。目がいいんですか。

薄井：かもしれない。

半谷：何がいいんだろう。

薄井：分からない。1番は京都から来ている人で、高等学校だから遠くから来ている人がいて、ハヤシ君という。京都に鉄砲を売っているお店があります。今もあるみたい〔小林銃砲火薬店(京都市上京区)のことか〕。

薄井：その息子さんなんだ。だから、多分、経験があるんでしょう。だから、彼が1番で、私は2番だった。後はハルピンに行つて実弾。

半谷：訓練がありますよね。

薄井：少年兵のときに実弾の射撃があつて、私は1番だよ。

半谷：そういう特技はあるんですね。

薄井：そう。でも2回しか経験がないので、2回うまくいっただけです。

半谷：ちょっと待ってください。今、芸術のことをいろいろ聞いていますが、洋物が多いですね。例えば落語とか浪曲はいかがですか。それは全然縁がない？ 完全にヨーロッパのクラシックの音楽を中心としたところが関心だということですか。

薄井：落語も浪曲も縁がないかもしれない。

半谷：縁がないんですね。

薄井：周りにないから。

半谷：生活環境の中でも、そういうものはなかったということですか。

薄井：ない。

半谷：今ずっと話を聞いていると、裕福なおうちという印象を受けますが、それで合っていますか。

薄井：裕福だったです。

半谷：むしろ戦後のほうがつらかったと書いてありましたけれども¹³⁾。

薄井：めちゃめちゃつらいです。だってね、1945年に軍隊に行くんだから、ほとんど〔戦争の〕最後まで知っているわけだけでも、必ず女性3人、男1人の使用人がうちにいたの。

半谷：すごいな。他にはご家族の方がいて、おじいさん、おばあさんもいらしたんですか。

薄井：ちょんまげだったおじいさんは、私が生まれる前にもう亡くなっています。だから、分からないんです。なんで裕福だったかというのと、徳川の家来から明治政府の大蔵省に行って、そこから何かで台湾に行くんです。台湾に行って、台湾は砂糖ができるということを知って砂糖のビジネスを始めるんです。明治キャラメルというのがあったでしょう。

半谷：あります。

薄井：あの前身の明治製糖です。あれはうちの祖父が始めた会社なんです。それからだんだんキャラメルやらチョコレートも作るようになってね¹⁴⁾。川崎に工場があって、創立記念日のときは呼ばれました。だけど、兄弟6人もいるから順番があまり回ってこないんです。私は一遍か二遍ぐらいかな。ともかく、それでお金がもうかったんでしょう。そのお金で神田から大森に引っ越したんじゃないかな。

半谷：東京大学に入られたのは何年になるんですか。

薄井：昭和17年の10月入学です。

半谷：戦前は入学が秋だったんですか。

薄井：2～3年の間だけよ。私は4月入学が突然、半年早まって10月になった最初の年ですもん。だから、昭和17年から。本当だったら18年の4月に入学するはず。だから、大学の試験勉強なんて全部していないわけです。でも、突然半年。

半谷：繰り上げると。

薄井：びっくり仰天。そのときに制度が変わって、高校を卒業したら浪人はできません。浪人は全部、工場か軍隊かどちらか。軍人を選ぶか、工場を選ぶかどちらかで、浪人はできません。そのときはもう実際にバレーをしていたの。それから、うちは公立の大学に入らないのは人間ではない。

半谷：大変なプレッシャーをかけられますね。

薄井：そうよ。公立の大学でも文学部なんていうものは絶対に相成らん。兄は頭が悪いから文学部で勘弁してもらったけれども。兄は東大の東洋史なんです。

半谷：その後、文藝春秋でしたね。

薄井：帰ってからね。だけど、私は文学部に行くことは相成らん。それから、公立の大学でなければ駄目だ。それから、自分ではバレーをしなきゃならない。そうすると、東京大学に行くより他、行く道はないわけです。だから、どんなに熱心に勉強したか。

半谷：そういう選択肢だったんですか。

薄井：そうよ。だから捕虜のときだって時々思いました。捕虜のときと試験勉強とどちらがつかったかといえ、もしかしたら、試験勉強のほうがつかったんじゃないか。大変な努力よ。私はそんな熱心に勉強するタイプじゃないよ。見てごらんさい。コーラスしたり、いろんなこと。

半谷：そうですね。いろんな所に行っていますから。

薄井：他にしたいことがいっぱいあったんだから、同級生はみんなびつくりしました。

半谷：急に勉強して。

薄井：大体、勉強なんかするたちじゃなかったもの。どうして東大に受かったのなんて言われたもん。

半谷：というと、成城時代はあまり成績が良くなかったんですか。成績は良いけど、勉強しないという人もいますけれども。

薄井：悪くはなかったと思います。10番以内だったとは思いますが。

半谷：でも、勉強していなかったはずが急に受験勉強を。じゃあ、別に東

大で何か勉強したかったからというわけではないんですね。

薄井：バレエのために。

半谷：バレエのために、バレエの時間を稼ぐために。

薄井：だって、バレエの場所は1つしかない。東京にしかないんだもん。今だったらどこにでもあるからいいですよ。

半谷：そういう形でバレエを第1目標にしながら東京大学ですけれども、東京大学の同級生にバレエとか芸術のことを語れる友達はいました？

薄井：少し。有名人で1人いました。邱永漢^{きゅうえいかん}。邱永漢が同級生なんです¹⁵。これはペンネームで本当は、炳南^{えいなん}というんです。台湾の人だから国籍が中国になったか、香港になったか、どちらかでしょう。

半谷：この人とは話ができたということですか。

薄井：そう。大学ではあまり友達ができないんです。

半谷：授業はちゃんと出ていらっやいました？

薄井：たまには。でも、ゼミなんていうのもあるから、ゼミのグループもあるわけで、後で大コンストラクターの何とか組の社長の所へお婿さんで行った学習院出の人も一緒にゼミだったの。邱永漢に聞くと分かったんだけれども、邱永漢も亡くなってしまったから。

大学に行っているうちに学徒動員というのが起こって、うんといなくなってしまうわけです。でも、私は早生まれだから徴兵年齢に達していないんです。学生は全部で350人ぐらいいたのに、25人ぐらいになってしまおう。だから、その25人は全部一緒に行動で農村に。

半谷：援農に行くとか。

薄井：いろいろあって、みんなと話すようになって、その25人にはバレエの話もしました。みんなバレエを知らないから、こういうものだと。

半谷：あまりいない。話を語る友達がたくさんいるわけではない。

薄井：たくさんいるわけではないです。でも、バレエを始めたのは、実技に入る前にバレエ研究会というのがあって。

半谷：蘆原〔英了〕さんの。

薄井：ええ。バレエ研究会に行っていて、そこにバレエをする気がない男の人が何人かいました。3〜4人ぐらい。その中に1人仲良くなった人がいました。中島という名字ですけれども、お父さんが有名な代議士で……中島弥団次。芝居は左団次、政治は弥団次というスローガンを作った人だ。今、それを思いだしていた。弥団次、すごい名前でしょう。

半谷：ええ。本名なんですか。

薄井：本名です。その人の息子さんが大変なフランスびいきで、ちょっと何かで大学は行かず、後で自殺してしまう。その人もバレエがとても好きで、一緒に古本屋を回ったりしました。

半谷：今、古本の話が出ましたが、当時集めたコレクションは戦争で失われず、ずっと続いて残ったんですか。

薄井：ええ。

半谷：処分されることもなく。

薄井：戦後一度、処分した。必要なものだけ残して、ちょっと楽しみのような本はお金の必要に迫られて、神田の専門の古本屋に来てもらって全部売りました。全部まとめて買ったのが牛山充というバレエの人。牛山さんが全部お買いになりましたと本屋が言っていたもん。だけど、後で私は全部どこからか買い戻しました。

半谷：薄井さんの収集癖はすごいですけど、集めるという意味では、レコード、SPは集めていらっしゃるのですか。

薄井：ええ。バレエのはできるだけ。でも、すごく少ないです。例えば、〈白鳥の湖〉なんて抜粋でSP盤2枚。それから、*Спящая красавица*〔眠りの森の美女〕はビクターで1曲あるだけ。そのときの題名は。

半谷：〈眠れる華人〉でしたね。

薄井：〈眠れる華人〉の円舞曲が1曲あるだけでした。それから〈くるみ割り人形〉はチャイコフスキー自身が組曲にしたから、あれは組曲で全部ありました。

半谷：今の話を聞くと、SPよりは活字のものを収集していらしたということになりますね。

薄井：そうですね。だって、あまりないもん。それでも買おうと思えば、ストラヴィンスキーの*Свадебка*、〈結婚〉。あれは多分、私が大学に行っている間にレコードになったんです。出た。でも、聴いたけれども、そのときは面白くなかった。

半谷：音楽が普通と違いますから。

薄井：でも、今聴いたら、こんなきれいな音楽はないと思った。その頃は分からなかった。それから〈春の祭典〉も分からなかった。

半谷：SPはあったんですか。

薄井：ありました。だけど、買わなかった。買ったレアなものは、プロコ

フィエフの Шут。

半谷：ありますね。〈道化師〉。

薄井：そう。〈道化師〉はアルバムであった。10インチの小さめのアルバムに入っていたから何枚かあったんです。でも、あまりよく分らなかった。でも、プロコフィエフは〈3つのオレンジへの恋〉の抜粋があった。それから、ピアノコンチェルトの3番があった。だから、それは熱心に聴きました。一番上の姉はピアノにとっても熱心だったから、感心したプロコフィエフのピアノコンチェルト3番を聴かせたら、こんなメロディーがなくて、音だけつながっているような人は、私は嫌いですと言われた。

半谷：だいぶ趣味が離れていきましたね。

薄井：そう、そう。

半谷：あと、後の話につながるので確認したいのですが、高校から大学時代の語学は何をされました？

薄井：大学は、そのときの教育に語学がないから、高校で終わりですが、第2外国語はドイツ語です。

半谷：ドイツ語ですか。

薄井：成城はドイツ語の先生しかいないの。フランス語の先生がいればよかったんだけど、私は高校が終わったら、すぐにどこかのフランス語の塾にちょっと通いました。

半谷：自分で行かれたんですか。

薄井：ええ。だけど、バレエのクラスが週に3回もあるから行く時間がなくなって、フランス語はとても中途半端です。ロシア語も耳で覚えただけ。

半谷：ですが、戦後は外国の雑誌を読まれていますよね。雑誌を読む程度の語学力でいうと何ができました？

薄井：一番できるのは英語。だって、帰ってきてからすぐ1951年に。

半谷：ああ、51年に翻訳がありましたね〔アーノルド・ハスケル『バレエ』みすず書房、1951年〕。

薄井：あれは50年ぐらいに頼まれた。だから、英語はよくできました。

半谷：ドイツ語があつて。

薄井：ドイツ語はあるけれども、ドイツはバレエからちょっと遠い国だからあまり役に立たない。

半谷：あまり役に立たないし、やる気もない。

薄井：本当に損したと思うんです。どうしたってヒトラーは嫌いだから、

それにつながって真面目に勉強する気がなかった。

半谷：大学の入試は外国語がなかったんですか。

薄井：外国語は英語だけ。

半谷：英語だけですか。

薄井：私は英語の答案を書くのに、私よりいい答案を書いた人はいないだろうと思っていたの。ワンワード、1語、分からない言葉があった。何だったか忘れてしまったけれども、ちょうど私の高校の担任の先生が英語の先生、シェークスピアの専門家で、入試に付いてきたので、終わってからこの言葉をきいたら先生も知らなかった。

半谷：じゃあ、もういいやと。

薄井：ええ。だから、調べなかったから覚えていない。

半谷：そういう感じで中学、高校、大学と進まれるんですね。戦争の話の前に最後の確認ですが、新聞記事の中で、記者の人がまとめたんでしょ、こういう書き方がされていました。「途方もない芸術を生みだすロシアという地に強烈な憧れを抱きながら、バレエ・リュスの文献を求めて東京中の書店をめぐった」¹⁶⁾。「いつかは北の大地を踏んでみたいと思っていた」¹⁷⁾。これで間違いはないですか。

薄井：間違いはない。だって、わざわざ神戸まで行ったもん。

半谷：えっ。神戸まで行って何をされたんですか。

薄井：古本屋のために。

半谷：バレエ・リュスの。

薄井：うん。だって、本当にフランスの雑誌の山だって全部見ていた。オペラ座の記事を幾つか見つけましたもん。その頃、1930年代、1940年代はバレエがファッションだったから、ファッション雑誌に多く出ているんです。必ず出ているのは『Vogue』。今でも『Vogue』という雑誌はありますよね。Vogueのフランス版でセザンヌ・リュスのパリのシーズンの月を一生懸命探していると写真がいっぱいあって、必ず初演の話が出てくる。だから、それはコレクションにたくさんあります。

半谷：でも、そういうときの憧れているロシアというのは、現実のロシアとは違いますよね。

薄井：そうです。

半谷：そこからさらに進んでロシア語をやって、あとはソ連という国へと、そういうつながりとは違う気がするんですが。

薄井：違いますよね。でも、時代だから、それは仕方がない。

半谷：じゃあ、逆に言うと、そのときの関心の中にソ連はありましたか。

薄井：そのとき？

半谷：ええ。

薄井：戦争に行く前？

半谷：戦争に行く前です。

薄井：関心はあまりないですが、偶然ソ連映画を見た記憶があるんです。題名は分からないし、どこで見たのかも分からないんですが、神田辺りの小さい映画館でしょう。ある女性が、プラトクみたいなのを着た女性が、人がいっぱいベンチに座った廊下のドアを開けて進んでいくんです。またドアがあって進んでも同じ光景。幾つも幾つもドアをすり抜けていって、とうとう最後に演壇があって誰かが座っている所へたどり着いて何か講義をする、プロテストをするという場面だけ覚えているんです。だって、ユニークだもん。部屋が幾つも幾つもつながっているなんて。それだけ。

それから、ソ連には世界的なバレリーナが3人いますというのを蘆原英了から聞いていた。写真ももらっていた。

半谷：それは誰なんですか。

薄井：マリーナ・セ묘ーノワ、ガリーナ・ウラノワ、ナターリヤ・ドゥジンスカヤ、この3人。これは超弩級なんですと言われた。ヨーロッパがかなわないんですと。

半谷：当時だと外国に出て演じるわけではないですよ。

薄井：でも、東勇作も言っていましたよ。東勇作は日劇でソ連から来たバレリーナと出会います。オリガ・サファイアという名前だったけれども、本当はオリガ・パヴロワ。清水〔威久〕さんという外交官と結婚したから。だから、彼女からソ連バレエの話は聞いているわけです。一番覚えているのは、衣装は非常に質素にして、踊りは上手にというのがソ連バレエのモットーでしたとオリガ・サファイアは言ったみたい。

半谷：何か分からないけれど、すごいものがあるというのはソ連の話にいつも付いて回りますね。

薄井：そう、そう。

半谷：だから、行ってみたいと思う人が出てくるので、これは大事です。

薄井：私は何かに書いているけれども、満洲里の国境を越えるときに、ドアを開けてロシアの空気を見たもん¹⁸⁾。

半谷：ここにあるんじゃないかというやつですね。

薄井：それから、こないだ京都新聞の人が来た辺りでようやく分かったんだけれども、2～3年前からシベリアの話聞きに来る人が増えたわけですね。でも、みんながみんな、4年間の話だから長いことかかるわけだけれども、薄井さんは特別だったんですねと言って帰るわけ。私は特別だと思っていないんです。

だけど、どうして特別な。だって、周りの人だって、ロシアの悪口を言う人は収容所では1人もいなかったもの。みんな一緒に飢えて、一緒に寒さだって耐えて。大部分がそうなんだから、ロシアのせいでこんな目に遭っているなんて言ったってしょうがないから誰も言わないんです。ロシア人はできる限り日本人に親切にしてやろうと常に思っていた気がするんです。私の周りの人は、みんなそう思っているの。私は運がよかっただけかもしれないけれど。ちまたにあふれている回想記を見ると。

半谷：恨みがいっぱいこもっていますよね。

薄井：ロシアに対して恨みが濃い。〔私は〕ロシアに恨みはないんです。だって、そうしたの日本の政府でしょう。

半谷：そもそもなぜ日本人があんな所にいるかという大本は。

薄井：大本は日本政府でしょう。だから、ロシアを恨む筋合いはないの。捕虜になる前に軍事政府で嫌な思いは散々しているわけでしょう。だって、この話は今、出なかったけれども、大学になったら周りの学生で日本が勝つと信じている人は1人もいないです。ゼロよ。

証拠はね、ある時いわゆる勤労奉仕で立川の飛行場の地ならしに行ったとき、みんなが言うには、俺たちはこれをアメリカ軍のためにやっているんだよな、なんて言いながらやっていたんだもん。それから、授業で経済学をやっていると、アメリカ経済の話も出てくるわけ。だから、経済力が全然違うことは。

半谷：当然ながら分かっている。

薄井：講義の中に入っているもん。例えば商船、船のオーシャンライナー、1隻造る時間は日本だったら、そんな大きくななくても1カ月はかかる。アメリカでは1週間です。自動車のパーツも工業力もあるから。それが一番アメリカ経済の話でびっくりしたこと。それだけの差がある国と戦っているんだ。だから、〔ソ連で〕捕虜になったって、とても嫌な国から行ったんだから。

半谷：同じぐらいの嫌な国というぐらいですよ。

薄井：そうよ。政府は嫌でも、接する人間は悪くないだもん。私は捕虜になったって一晩中、中隊長にぶん殴られたこともあるけれども、ロシア人から手を出されたことは1回もないです。ロシア人が人を殴るのは見たことがない。それはみんなが言います。去年ぐらいに岩波新書で出た、自分のお父さんの一生を書いた。

半谷：ありました。小熊英二〔『生きて帰ってきた男：ある日本兵の戦争と戦後』岩波新書、2015年〕。

薄井：小熊さん。あれのどこかの書評に、主題になっている小熊さんはシベリア抑留の話をしていても、ロシアの悪口は一言も出てこないと書いてあった。だから、ロシアの悪口があれば人は気が付くわけ。同じ収容所について帰ってきた人の集まりもしばらくあったけれども、ロシアの恨みを言う人は1人もいなかった。

今、生き残っている5つぐらい下の人がいます。軍人じゃないんです。軍属なのに行く所がなくて、兵隊にくっついていたら。

半谷：一緒に連れていかれた。

薄井：だけれども、その人は割合、懐かしいの。ロシアで初体験もしているし、ガールフレンドもできた。ついこないだだけれど、帰ると言ったらWith me って言われた、何ていうことなのって。それは連れていってくれと言ってたんだ。そうだったのかなんて言っていたの。だから、みんな嫌じゃなかったんです。私は嫌な所から嫌な所へ来ているわけで、あまり恨みはないわけ。だから、なんで特別と言われるのか、ようやく分かった。本当に周りの人は戦争が終わって初めて、天皇は神様じゃないと気が付くんです。本当に神様だと思っていたんです。それよりももっと強くみんなが一番思っていたのは、神風が吹くと全員が思っていた。だから、負けないうと。そういうとても不思議な理由から日本は負けないうと思っていたの。でも、それは政府が吹き込むわけでしょう。

半谷：でも、薄井さんがそのように冷静に見ることができたのは、なぜなんでしょう。なぜ世間の人が、神風が吹くとか天皇が特別だと言っても距離を持てたのか。

薄井：普通の人、私の時代は小学校4年間か6年間しか行かないだもん。だからよ。

半谷：やっぱり教育の差ですか。

薄井：知識の差じゃない？

半谷：知識の差ですか。

薄井：うん。それは本当に気の毒でした。だから、時代が違うんだ。あなたはお若いから想像がつかないわけ。

半谷：そう。だから、話をうかがいたいんです。文字で読んだだけでは分からないことがあるので。

注

- 1) <http://www1.gcenter-hyogo.jp/ballet/index.html> [2018年10月13日最終閲覧：以下すべて同じ]
- 2) 近年の成果は、「『邦楽4人の会』の誕生：オーラル・ヒストリの中モクワ青年学生平和友好祭(1957)』『SLAVISTIKA』第32号(2016年)、191～212ページ(梅津紀雄と共著)；「1957年モスクワ平和友好祭：ある日本人参加者の思い出」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』第18号(2017年、291～312ページ)と第19号(2018年、267～288ページ)。
- 3) 「過酷シベリア抑留 証言 京の男性2人 記録映画出演」『京都新聞』2017年8月17日
- 4) 「ストーリー 薄井さんのシベリア抑留」『毎日新聞』2016年10月9日朝刊
- 5) 日本近代演劇 デジタル・オーラル・ヒストリー・アーカイヴ「薄井憲二聞き書き」2ページ <https://oraltheatrehistory.org/archives/38>
- 6) 薄井憲二「バレエ・リュスに憧れて」ダンスマガジン編『日本バレエ史』(新書館、2001年)、40ページ。
- 7) 日本近代演劇「薄井憲二聞き書き」3ページ
- 8) 日本近代演劇「薄井憲二聞き書き」2ページ
- 9) 日本近代演劇「薄井憲二聞き書き」3ページ
- 10) 日本近代演劇「薄井憲二聞き書き」2ページ
- 11) 1941年6月23日、ローゼンシュトック指揮の第227回定期。NHK交響楽団演奏会記録 <https://www.nhkso.or.jp/library/archive/index.php>
- 12) 薄井さんが参加した頃の成城合唱団の様子は、次を参照：加藤一郎「成城合唱団の50年」『図書』1985年11月号、57～59ページ。
- 13) 日本近代演劇「薄井憲二聞き書き」3ページ
- 14) 第一次世界大戦の勃発でヨーロッパからの菓子類の供給が全面途絶したことを受けて、明治製糖は1916年12月に大正製菓株式会社をつくる。だが、その二か月前に創設された東京菓子株式会社との無用の競争を避けるため、同社の解散と東京菓子への吸収合併(ただし株の過半数は明治製糖が所有)

- で合意し、1917年6月に新しい東京菓子株式会社が発足する（現社名の明治製菓に改称するのは1924年）。その際、大正製菓側から送り込まれた取締役四人のうちの一人が、薄井さんの祖父、薄井佳久である。明治製菓社史編集委員会『明治製菓の歩み：設立から50年』（明治製菓、1968年）、39～42ページ。
- 15) 邱永漢は、1955年に「香港」で直木賞を受賞。作家のかたわら、経済評論家、経営コンサルタントとしても活躍。初期の代表作である食べ物エッセイ『食は広州に在り』（龍星閣、1957年：現在は中公文庫）は、薄井さんを通じて知り合った薄井恭一の勧めで関西の食味雑誌『あまカラ』に書いた連載が元になっている。
- 16) 「ストーリー 薄井さんのシベリア抑留」『毎日新聞』2016年10月9日朝刊
- 17) 「創作の原点——戦後70年 日本バレエ協会会長・薄井憲二さん：下「火の鳥」は消えず」『毎日新聞』2015年3月23日東京夕刊
- 18) ロシアの舞踊誌が主催する「踊りの魂賞」を受賞した際の特集記事にも、「これがアンナ・パヴロワが吸っていた空気か」と感慨にひたたと書かれている。*Воскресенская Н.* «Рыцарь танца: Кэндзи Усуи», Балет. 2016 № 2. С. 22.